千刈狸の呟き

～ オィ 老い！もう少し待ってくれ ～

フレイル狸

この数年、足腰の衰えに気づいて一日7000歩のウォーキングを自分に課すことにした。これをクリアするには、平日なら入院患者の回診を一日最低４回しなければならない。患者にとって悪いことではないと思うが、「あの病院では患者だけでなく、医者も徘徊している」という噂が立つとまずいので、目立たないようにやっている。

回診が増えると、自分の受け持ち患者以外にも目を配る余裕ができる。去年の夏、院内を眺め歩きながらある個室の前を通った時、ネームプレートに（イニシャルにすると）MYとあった。その名前を見た途端、足が止まった。同時に、遠い昔の嫌な思い出がよみがえってきた。珍しくはないが、忘れられない名前だったからだ。

それは、小学４年生の新学期だった。学級委員の選挙が行われ、私は副委員長に選ばれた。恥ずかしいような、しかし選ばれたことでまんざらでもない気持だった。ところがそのあと休み時間になると、４～５人の同級生が「コ○○ー！副委員長反対！」と繰り返し叫びながら横並びに腕を組み、教室内でジグザグデモを始めるのだった。その首謀者の名前がMYだった。

時はまさに1960年日米安保で世の中が騒然としており、「安保反対！安保反対！」と叫びながら新宿や渋谷の駅前を埋め尽くす街頭デモ隊の姿が連日テレビニュースで放映されていた。MYは学級委員選挙の結果を茶化し、同級生を扇動し安保デモを模倣したのだと思う。社会問題を教室に持ち込む才はあっても相手の気持ちを読めない小賢しい奴だった。まだ９歳の私だったが、自分を否定されたことに大きく傷ついた。

「やめろよ！」と何度も首謀者に詰め寄ったが、やめるどころかますます図に乗ってみんなをけしかけ、あごを突き出したドヤ顔を近づけてきた。そのとき、私はこぶしで彼の頬を殴ってしまった。彼の口から鮮血が流れた。反撃されるかもしれないと身構えた。しかし、彼は口元を手で抑えヒーヒーと泣くだけだった。血を見たことで私だけでなく同級生たちも狼狽えた。ポケットに入っていたテッシュを彼に差し出したまでは覚えているが、その後の記憶がない。この出来事は学級内で問題になることもなく、担任の先生も知らなかったようだ。

あれから60年以上経過しすっかり忘れていた。だが、MYという名前を見てギクリとしたのは、あの時のトラウマが強く残っていたからに違いない。その後、この病室の前を通るたびに、どんな患者でどんな疾患だろうか、と気になった。ある時ドアの窓越しに中を覗いたが、寝たきり状態で顔はよくわからなかった。

小学校は秋田市で、ここは由利本荘市だし、同姓同名の他人と考えていたが、「まさか彼では？」という思いが芽生えてきた。主治医でない患者のプライバシーを覗くのは抵抗があったが、年齢だけならいいだろうと、ある時ついにカルテを見てしまった。

なんと私と同じ歳だった。「やはりあいつか！」と気持ちが昂った。つい他の項目にも目が泳いでしまったが、本人かどうかの決め手になるものはなかった。もはや、直接会ってみるしかないと思った。

「こんにちは」と病室に入り、顔を近づけて見ると、彼だと直感した。「この病院の医師だが、偶然あなたの名前を見て小学時代の同級生かもしれないと思い来てみた」と説明した。彼は怪訝な顔で私を追視した。「秋田市の土崎に住んだことはないか？」と尋ねた。顔を動かすのは辛そうだったが、首を縦に振った。「小学校はどこだった？」と聞いたら「港北小学校」と声を出して答えた。当時と声質は変わっていなかった。これで決まりだった。「私は４年の時の同級生だが覚えているか？」と尋ねた。しばらく私を凝視した後、彼は首を横に振った。あの時の彼の行為は今でも許しがたく、殴ったことさえも正当だと思うくらいだ。しかし今、こうして横たわる年老いた男が小学４年の時の同級生とは一つに重ならず、現在の彼の状態には同情すら感じた。また、同年の自分も同じように“老い”を迎えているのだと自覚した。それ以上は話すこともせず、私は病室を後にした。

秋に、小学校時代の有志同窓会があった。このとき何人かにMYについて聞いてみたが、誰も覚えていなかった。あの出来事はもはや当事者の私しか知らないのかもしれない。

やがて、カラオケが始まった。横浜から来たS君は、長かった海外出張を彷彿させるようにアメリカンポップスを何曲も歌った。卒後地元で頑張るT君は、ド演歌とおもいきや英語のロックンロールで、しかも上手くて驚いた。私も触発されビートルズを歌った。しかし、十数年ぶりのカラオケで、高音が出ず音程がはずれ息も続かず、「こんなに下手だったか！」とがっかりした。

寡黙な人より多弁な人が長生きする印象がある。寝たきりでも不穏でよく叫ぶ患者は肺合併症が少ない気もする。声の衰えに気づいた私は、近い将来の嚥下や呼吸機能に不安を覚えた。そこで、長距離通勤のメリットを生かし、車中で発声練習をすることにした。「車の中で叫んでいる変な高齢者がいる」と対向車に気づかれないようにしながらだが。

老いは避けられないが、ささやかな抵抗を凝らす日々である。